家族間の敬意表現の変化

—ふたつの『東京物語』を比較して—

Changes in honorific expressions among family members:
Comparison of the two versions of *Tokyo Story*

澤　﨑　宏　一

1．序章

2003年は映画監督小津安二郎生誕100年にあたり、日本内外で記念行事が行われた年であった。そのひとつとしてフジテレビが現代版『東京物語』を制作した。1953年に小津が原作『東京物語』を発表してから丁度50年後となる。現代版がどの程度好評だったかは定かではないが、ふたつの作品の比較は文化、言語、歴史等色々な分野で興味深い内容を提供してくれると思われる。

本稿では、ふたつの作品における敬意表現に焦点をあて、過去50年の間に変化した家族同士の言葉遣いについて論じる。原作が世に出た頃の日本は、敬語という観点から大変意義深いときであった。戦争が終わってまだ10年を経ておらず、過去の反省から戦争以前の敬語に対する通念が大きく変わろうとしていた。映画が発表される１年前には文部省国語審議会が「これからの敬語」を建議して新しい敬語の考え方を世に示してもいる。

このような状況を踏まえ以下では、53年版と03年版『東京物語』の敬意表現を比較し、ふたつの作品間に次の３点で大きな隔たりのあることを指摘する。その３点とは、現代版が原作に較べて(1) 敬語が簡素化されていること、(2) 世代や人物に応じた敬意表現の変化がより自由であること、(3) 同一人物でも場合に応じた敬意表現の使い分けをしていることである。これらの違いにより、原作は「これからの敬語」を反映させた形とはなっておらず、当時としてはこの改革案をそのまま実生活に重ね合わせるには無理があったことを併せ論じる。

本論に入る前に、ドラマの台詞を比較することの意義について確認しておきたい。ドラマは研究材料としてはデータが取りやすい利点があるが、声の高さ、発話速度、ポーズの入れ方などが現実の日常会話とは違っている（杉藤, 2002）など、ドラマならではの欠点もある。さらに、ふたつのせりふが全く同じ登場人物と場面で語られることが少ないことも、正確な比較を阻む原因となっている（荻野, 1983）。

しかし、03年版『東京物語』は、50年前の作品をなるべく忠実に再現したもので、登場人物や人間関係、筋書はほぼ同じである。実際の台詞も直接比較できるほど似通っている箇所が多く、作品間の比較が通常に比べて容易だと言えるだろう。また、ドラマの言葉遣いが現実の会話をありのままにくみ取ったものではないとしても、現実の一側面を何らかの形で捉えていると言えるはずである（熊谷, 2003）。このような理由から、ドラマの中の会話にデータを求めることの短所はあるものの、ふたつの『東京物語』を比較してみることの意義は大きいと考えられる。

2．原作『東京物語』が発表された当時の社会と敬語意識

まず53年版が制作された頃の日本は、敬語という観点から見てどのような状況にあったのかを見てみたい。当時は戦争が終わってまだ10年を経ておらず、過去の反省にたって民主主義が声高く叫ばれた混乱の時代であった。それは、昭和20年以前の敬語に対する通念が大きく見直されたときでもあった。

戦前の敬語の通念は、文部省が発表した学校教育のための作法・礼法などの要項を通して窺い知ることができる。そこでは、天皇そして各家庭の長上に対する敬意表現が強調され、さらには皇室やしかるべき職位にある人物への言葉遣い・呼称などが事細かに記されている。敬語は文字通り上位の身分に対する敬いの表現として捉えられていた。例えば、1941年（昭和16年）に制定された中等学校向けの「礼法要項」では、長上に対しては「です・ます」ではなく、なるべく「でございます」、「であります」、「致します」、「遊ばす」などの言葉を用いることが説かれている（西田, 1987）。また井上(1983)は、1939年（昭和14年）に出版されたしつけの本に以下のような記述があることを指摘している。

> ただ使用人などの目下の者に向かっては、（児童は）「お母様が斯う仰つしやた」と（双方の目上としての母親に）敬語を使はなければならない。（井上, 1983, p. 19, （　）内の補足は井上による）

つまり、戦前は上下関係の枠組みが明確に示されており、下位者が上位者にものを言うときは尊敬語と謙譲語を用いることが原則であったということがわかる。そしてこのことは家族の間でも決して例外ではなかったのである。

以上のように、戦前の敬語は上下関係の枠組みを唯一の柱としていたので、戦後の民主主義の風潮とは当然相容れなかった。敬語を簡素化しようとする議論が活発化し、中には日本語から敬語を完全に取り払ってしまうべきだとする主張も生まれた（西田, 1987)。そのような議論を踏まえ1952年（昭和27年)、文部省国語審議会により「これからの敬語」が建議され[1)]、敬語の使い方に対する新しい指標が示された。戦争が終わって7年、そして小津安二郎が『東京物語』を発表する1年前のことである。

「これからの敬語」で謳われている基本方針は以下の4つである。

(1) a. できるだけ平明・簡素な敬語を使用する
　　b. 上下関係を表すのではなく、基本的人権を尊重できる敬語にする
　　c. 女性の過度な敬語や美化語を改める
　　d. 商業方面での過度な敬語・謙譲語を改める

ひとつ目の「平明・簡素な敬語」では、必要以上の尊敬語・謙譲語・美化語などを改め丁寧体を用いるよう奨励している。「です・ます」を形容詞につけて「小さいです」や「古いです」などとする言い方もこのとき認められている。次の「基本的人権を尊重できる敬語」とは、職場（職員相互）や学校（教師と生徒の間）などで丁寧体の使用を基本とすることや、相手を呼ぶときの一般的な敬称を「さん」とすることなどに具体的に示されている。3番目の「女性の過度な敬語や美化語を改める」では、名詞に「お」や「ご」をつけ過ぎる傾向を戒めている。最後の「商業方面での過度な敬語・謙譲語」ではこのためだけの具体的な記述はないが、上記内容に加えて、尊敬語の形として「お～になる」、「～れる・られる」を正当化し、「～遊ばす」をしりぞけていること等が関連していると思われる。いずれにせよ、「これからの敬語」で示されている内容は、項目により違いはあるが現在の言葉遣いにかなり近いものになっていると言える（宮地, 1983；山口, 2000)。

以上が、資料からうかがえる53年当時の敬語に関わる日本の状況である。それは、

1）「これからの敬語」は、文化庁のホームページ（国語政策情報システムのページ：http://www.bunka.go.jp/kokugo/）で参照できる。

それまで家族の中であっても複雑・厳格に決められていた敬意表現が、終戦後の民主主義の波と共に簡素化の道を進み始めたときであった。では、その転換期に大きな役割を果たしたと思われる「これからの敬語」は、当時の人々が抵抗なく生活に取り入れられるような内容だったのだろうか。当時の状況を国語学者は、「敬語というものが封建的であり、恥ずべきものという考え方が強かった」（大石，寿岳，米田，西村，1983，p. 84）ので、「簡素になるのがよいというたてまえに対して、ちょっと反対できなかった」（外山，稲垣，青木，方賀，樺島，1982，p. 166）と回想している。すると「これからの敬語」は、既に民衆の間でも受け入れの下地が整っていたもので、まさに改革の気運が高まった中での発表だったと解釈できる。しかしその一方で、「これからの敬語」について「この建議書が出た頃には画期的に新しくて、『こんなに敬語を使わなくてもいいのか』と思うくらい新鮮だった」（山口，2000）とする意見も見られる。また1953年に愛知県岡崎市で行った住民調査では、43%が家庭内でも目上には敬語を使うべきであると答えており（国立国語研究所，1983; 野元，1978)、これによれば改革案のめざすところと当時の一般の人たちの考え方とには相当の食い違いがあったと思えるのである。

では53年版の『東京物語』中に見られる登場人物の対話は、前年に発表された「これからの敬語」の内容がどのくらい反映された形になっているのだろうか。「これからの敬語」は現在の言葉遣いと照らせば違和感の少ないものなので、もし53年版が何らかの影響を受けているとすれば、両作品の言葉遣いにも大きな食い違いはないと予想される。しかし、戦前の敬語に対する通念が当時まだ残っていたとすれば、原作の言葉遣いは現在のものとは大きく異なっていると思われる。また、もし当時と現在が大きく異なるのであれば、50年の間にどのように変化が現れたのだろうか。次節以降では、ふたつの作品を比較しながら、これらの問いについて考えていきたいと思う。

3．ふたつの『東京物語』

実際に作品中の対話比較に入る前に、物語のあらすじと、二つの作品間で登場人物の設定に特筆すべき変化があるところを紹介しておく。

3. 1. あらすじと作品間の設定の違い

主だった登場人物と話の流れはどちらの作品も同じである。尾道に住む老夫婦が、東京で独立して暮らす子供たちを訪ねる。しかし、子供たちにはそれぞれの生活があり、十分な親子のコミュニケーションがとれない。そんな中、老夫婦のために時間を

作り優しくもてなしたのは死んだ次男の嫁、紀子だけだった。実の子供達とは最後まで十分な交流ができぬまま二人は尾道に帰る。しかしそのまま母親は体調を崩し危篤となってしまう。知らせを受けた子供達は尾道に集まり久しぶりに家族全員がそろうが、母親はついに目を覚ますことなく死んでしまう、という筋書きとなっている。主な登場人物は表１のとおりである。

表１：『東京物語』の主な登場人物

	名前
両親	周吉（父）、とみ（母）
長男一家	幸一（長男：開業医）、文子（妻）、実（長男）、勇（次男）
長女夫婦	しげ子（長女：美容院経営　原作では「志げ」）、庫造（夫）
次男夫婦	昌二（次男：既に死亡）、紀子（妻）
三男	敬三
三女	京子（教師。両親と尾道に暮らしている）

登場人物と全体の筋書きは同じでも、二つの作品には時代の差を反映した違いがいくつかある。主だったものは以下の通りである。まず53年版では、長男の妻（文子）は専業主婦として家庭を守る姿が描かれている。二人の子供達は純真で、親子での外出を楽しみにしている。二女（しげ子）は美容院を経営しており、夫も別の仕事があって毎日が忙しい。三男（敬三）は大阪で暮らしており、両親（周吉ととみ）が東京から尾道に戻る際に大阪で会う、といった設定になっている。これに対して03年版では、以下のような変化が表れる。まず、長男の妻は専業主婦だがPTA活動で家を空けることが多く、子供の高校受験のことで夫と意見が対立している。上の息子（中学生）は反抗期で、ドラマ全編を通して誰が話しかけても一言もしゃべらない。次女夫婦は、定収入があるのは美容院を経営する妻だけである。夫はフリーのイラストレーターで仕事のない時の方が多く、しげ子が時々仕事を見つけてきている。夫婦げんかでは妻が夫の頭をなぐる場面もある。三男は東京にいるが仕事が忙しく、両親が上京している間に一度も連絡がとれない、といった具合である。

3. 2. 作品の比較

3. 2. 1. 敬意表現の簡素化

まず、ふたつの『東京物語』で、主な登場人物がお互いにどのような敬意表現を使っているかを全体的に見てみたい。比較の対象としたのは、ふたつの作品で登場人物の現れ方に差が少ないと思われる7人で、父（周吉）、母（とみ）、長男（幸一）、長男の嫁（文子）、次女（しげ子）、次男の嫁（紀子）、そして三女（京子）である。

表2：言葉遣い一覧：53年版東京物語

話手＼相手		両親		長男夫婦		次女	次男嫁	次女
		周吉	とみ	幸一	文子	しげ子	紀子	京子
両親	周吉		普	普	普丁	普	普	普
	とみ	丁尊普		普	普	普	普丁	普
長男夫婦	幸一	丁尊	丁尊		普	普	普	
	文子	尊丁	尊丁	丁普		丁	普	
長女	しげ子	丁尊普	普丁尊	普	普		普	普
次男嫁	紀子	尊丁	尊丁	丁	丁			普
三女	京子	丁	丁			丁普	丁尊普	

（尊=尊敬語、謙=謙譲語、丁=丁寧体、普=普通体）

表３：言葉遣い一覧：03年版東京物語

話手＼相手		両親		長男夫婦		次女	次男嫁	次女
		周吉	とみ	幸一	文子	しげ子	紀子	京子
両親	周吉		普	普	普	普	普	
	とみ	丁普		普		普	普	普
長男夫婦	幸一	丁	丁普		普	普		
	文子	尊丁	尊丁	丁普		普	普	
長女	しげ子	普	普	普	普		普丁	普
次男嫁	紀子	尊丁普	尊丁普	丁	丁	丁		
三女	京子	普	普			普	普	

（尊=尊敬語、謙=謙譲語、丁=丁寧体、普=普通体）

表２と表３は、53年版と03年版の言葉遣いをそれぞれまとめたもので、縦列の人物が話し手を、横列の人物が聞き手を示している。尊敬語や謙譲語を交えて話をしていれば「尊」が、丁寧体を使っていれば「丁」が、普通体ならば「普」がそれぞれ表記されている。例えば表２で、とみが周吉に対して話をするときには「丁尊普」と表されているが、これは丁寧体を基本にしながら尊敬語・謙譲語も交え、たまに普通体も見られたという意味である。表の登場人物は父親の周吉から三女の京子まで、おおかた年齢順に並んでいる見当となっている。[2)]

2）文子としげ子に関しては、年齢の関係が作品中で明らかになっていない。

表を見てまず気がつくのは、53年版の『東京物語』に比べて、03年版では言葉遣いの丁寧度が下がっていることである。53年版では、年齢の下位者から上位者に向けて話す方がその逆よりも丁寧度が高くなっているのがはっきりとわかる。例えば、両親の周吉ととみに対しては、家族のほぼ全員（幸一、文子、しげ子、紀子）が尊敬語と謙譲語を織り交ぜながら話をしている。尊敬語や謙譲語を使わない場合も、丁寧体の使用が基本になっている場合が殆どである。年齢が一番若い三女の京子は[3]、尊敬語や謙譲語こそ使っていないが普通体だけで話を通している相手は一人もなく、必ずどこかで丁寧体を使用している。一方、年齢上位者が下位者に向かってものを言うときは、殆どが普通体である。父親の周吉は誰に対しても普通体を基本としているし、母親のとみが普通体以外の言葉遣いをするのは周吉に対してしだけである。ただ一度、周吉が文子に対して、またとみが紀子に対して丁寧体を使用しているが、それは文子への儀礼的な挨拶と紀子の厚意に恐縮する気持ちを表しているときとなっている。

03年版を見てみると、上位者と下位者の間の言葉遣いの違いが50年前よりも縮まり、尊敬語・謙譲語の現れ方がずっと少なくなっている。まず周吉ととみに対して尊敬語・謙譲語を使っているのは義理の娘である文子と紀子だけである。実の子供である幸一、しげ子、京子はまったく尊敬・謙譲語を交えていない。年齢上位者から下位者へ向けての言葉遣いを見ると、これは53年版と変わらず普通体が主流となっている。

これらのことを、実際の会話を例にとりながらみながら比較していきたい。例(2)は両親が初めて長男夫婦の家を訪ねたときの会話である。（尊敬語・謙譲語が使われている部分は下線を付した。）

(2)a.　53年版（場面：東京に着いて、幸一夫婦の家で）

幸一：　お母さん、疲れたでしょう。汽車の中、寝られましたか？

とみ：　へえ、ええあんばいに。

（略）

文子：　いらっしゃいませ。（正座して挨拶）

周吉：　やあ。（二人、頭を下げる）

文子：　いつもごぶさた申し上げておりまして。

周吉：　いやあ、今度はまたいろいろお世話になります。

（略）

3）京子は、はっきりした年齢は示されていないが、20代前半の役回りと想像される。

文子： あのう、およろしかったらお風呂。
幸一： ああ、お父さん、風呂どうです？
周吉： そう。
しげ子：お母さん、お使いになったら？
文子： あ、お浴衣。
とみ： ええんよ、文さん。持ってきたけ。
（略）
幸一：お父さん、てぬぐいなんかお持ちですか？

53年版では、文子は両親に対して、しげ子は母親のとみに対して、幸一は父の周吉に対してそれぞれ尊敬語・謙譲語の使用が見られる。親子久しぶりの対面で、普段以上に言葉遣いが丁寧になっているということはあると思われるが、似たような言葉遣いは他の場面でも散見される。しかし03年版では、同じ場面で幸一としげ子の両親に対する尊敬語は消えており、これは全編を通して変わらない。

(2)b. 03年版（場面：東京に着いて、幸一夫婦の家で）
幸一： （周吉ととみに向かって）こっちです。どうぞ。
ただいまあ、帰ったよう。
文子： あら、どうも。ごぶさたしております。
（略）
しげ子：迎えに行かれんで悪かったね。ちょっと手が放せんで。
周吉： ああ、忙しかったんじゃろ？
しげ子：おかげさんで。
とみ： 庫造さんは元気？[4)]
しげ子：相変わらず。お母さんによろしくって。
（略）
文子： すいません。どうぞこれ、お使いになって下さい。（おしぼりを渡す）

以上の例からもわかるとおり、現代版『東京物語』では、家族間で見られる敬意表現の丁寧度が50年前と比べて低くなってきている。そしてその原因は、主に両親に対す

4）庫造はしげ子の夫である。

る尊敬・謙譲語の使用が丁寧体や普通体に置きかわったためだと言えるだろう。

このことは前節で挙げた、「これからの敬語」に見られる考えが53年版『東京物語』にどの程度反映しているかという問いに対して否定的な答えを提供していると考えられる。53年版作品の登場人物の対話に見られる敬語からは、「これからの敬語」に意図されているものよりも、むしろ戦前の敬語の使い方が色濃く残っているという印象の方が強い。『東京物語』を見る限り、民主主義を叫びながら当時の民衆自身が積極的に日常生活の中で言葉遣いを変え始め、それに後押しされた形で「これからの敬語」が生まれてきた訳ではなかったと見るべきだろう。民衆は戦前からの言葉遣いを継承していたが、識者により「これからの敬語」が建議され人々の前に不意に提示されたと捉えた方が良いかも知れない。そしてこのことは、以下に述べるように二つの『東京物語』に見られる他の細かな違いからも言えることである。

3. 2. 2. 世代や人物による待遇表現の違い

53年版と03年版の『東京物語』を比較すると、現代版の方が待遇表現が簡素化されていることを上で述べた。しかし実際には、どの登場人物も一律に言葉遣いが簡素化されているわけではなくて、世代や登場人物によって簡素化の度合いが違うということも、二つの作品を較べてみるとわかることである。53年版では登場人物が両親に向かって話をするときは、長男の幸一から三女の京子に至るまで、尊敬語・謙譲語あるいは丁寧体以上をとり混ぜている。これは世代や個人を問わず守られている約束事のように思われる。それに対して03年版では、丁寧体以上を基本に使っている幸一夫婦や紀子がいる一方で、普通体のみを絶えず使用しているしげ子や京子がいるのである。以下では、長女のしげ子と三女の京子に焦点を絞り、二人の言葉遣いの変化を見てみたい。

まずしげ子の場合である。上の表3と例(2)bで既に示されているように、しげ子の言葉遣いは現代版では完全に普通体になっている。これは幸一や文子が同じ(2)bで見せる丁寧さの度合いとは対照的である。次に京子の例を見てみよう。例(3)aは53年版からの引用である。（丁寧体を使用しているところに下線を付した。）

(3)a.　53年版（場面：尾道の家で。東京に発つ準備をしている。）

京子：　はい、お母さん、これお弁当。

とみ：　あ、おおきに。

京子：　じゃあ、<u>行って参ります</u>。

周吉： ああ。お前、学校が忙しけりゃ、わざわざ来てくれんでもええよ。
京子： いいえ、ええんです。5時間目はどうせ体操ですから。
周吉： そうか。
京子： じゃあ駅で。
周吉： ああ。
京子： お母さん、魔法瓶にお茶入れておきましたから。
とみ： ああ、ありがと。
京子： じゃあ、行って参ります。

一行目の「はい、お母さん、これお弁当」以外は、京子の話す文は全て丁寧体で終わっている。これに対して、03年版では同じシーンでの京子の言葉遣いが普通体に変わっている。

(3)b. 03年版（場面：尾道の家で。東京に発つ準備をしている）
京子： お父さん。
周吉： ん？
京子： またお風呂に忘れとったよ。（ひげそりを渡す）
周吉： おお。
とみ： ありましたか？
周吉： あった、あった。（とみと京子見つめ合って笑う。）
京子： じゃあ、気をつけて行ってきてね。お兄ちゃんたちに、たまには帰って来てって言っとってね。
とみ： ああ、私らがおらん間、ちゃあんとやるんよ。
京子： 大丈夫。じゃあ行ってきます。

例(3)bでは、母親のとみが周吉に丁寧体を使っているのにも拘わらず、娘の京子は普通体で通していてかなりくだけた態度をとっている。最後の「行ってきます」で丁寧体が使われているが、これは意図的な丁寧体ではないだろう。「行ってきます」は慣用句ともとれる上、他は全部普通体であるので、京子がここでのみ積極的に丁寧体を使っているかどうかは疑問が残るからである。

血のつながった兄妹でありながら、片や丁寧体を使う幸一がいて、他方に普通体を使うしげ子と京子がいるのは、ひとつには世代の違いが影響していると考えられる。

幸一には既に中学生を長男とする子供が二人あるが、京子は就職してからさほど年月が経っていないと思われる設定である。この二人の間には10年から15年の年齢の開きがあると想像できる。長女のしげ子がこの二人の間のどの辺に位置するかは十分な情報がないが、53年・03年版ともに夫との間に子供がいない設定であることからして、幸一からも京子からも同じくらい年が離れていると想定して良いだろう。つまり、幸一、しげ子、京子の3人はそれぞれ別々の世代グループに属しており、この三者のうち、幸一としげ子の世代の間に、丁寧体と普通体を分ける隔てがあると言えるだろう。

兄妹の言葉遣いの違いの理由として、世代差の他に考えられるものは個人の性格や考え方の違いであろう。京子は登場回数が少ないので断定しづらいが、しげ子についてはふたつの作品共に手腕があり勝ち気で、時に冷淡ともとれる性格の女性として描かれている。例えば、しげ子は人を雇いながら美容院経営をしていて毎日が大変忙しい。夫の庫造に対して意見や指示をだすことが多く、夫婦の主導権は明らかにしげ子にある。03年版では、夫婦げんかの際庫造の頭を殴る場面があることは上述した通りである。またふたつの作品において、母が危篤との知らせを受けたときはまず喪服の心配をし、葬式が終わってからは一番に形見分けの話を持ち出している。このような人物設定のしげ子が両親に対して使うのが普通体である。一方、長男の幸一は開業医であり知識階級に属すると言って良いだろう。また、両作品共にどちらかというとおとなしく控えめな性格の持ち主として描かれている。上京して来た両親についてしげ子と話し合う場面が2～3ヶ所あるが、殆どがしげ子が意見を出しそれに幸一が従う形で物事が決定している。幸一が何かに意見をしたり、率先して何かを実行するという場面はひとつもない。そしてそのような人物設定の幸一が両親に対して使うのが丁寧体である。つまり、しげ子と幸一は対照的な性格付けをされた二人である故に、03年版では二人の言葉遣いが違っているとも言える。

53年版でも性格描写と言葉遣いの差があるのだが、03年版ほどはっきりとは示されていない。例えば、前掲の表2にもあるように、53年版でしげ子は両親に対して普通体を何度となく使っている。これはしげ子の性格付けが言葉遣いに現れた結果かもしれない。しかし03年版のように普通体しか使わないということはしておらず、尊敬語や丁寧体を使っているときも多い。例(2)aでは、しげ子が母親に風呂を勧める場面で「お母さん、お使いになったら？」と普通体で発話を終わらせている。しかし「お使いになる」という尊敬表現も併用している。似たような例として、「ゆっくりしてらっしゃれば？」、「帰ってらしたの？」、「おっしゃらなかったの？」等がしげ子から両親に対しての発言として他に見られる。このような普通体で終わる尊敬語の使用法は昔

はよく見られたことであり（浅田, 2001)、必ずしも表現がぞんざいだとは言えないかも知れない。

以上から、53年版では、話し手が誰であれ、両親に向かって一定以上の敬語表現を会話に織り交ぜるという点で敬語のルールに乱れはなかったことがわかる。ところが、03年版ではそのような横並びの規則性は弱まり、世代や個々人単位で言葉遣いのスタイルが決まるという傾向が見られるようである。50年前は親子の上下関係に従って個人差の少ない一律の言葉遣いが要求されがちだったが、現在では話者の世代、考え方、性格等により、待遇表現のより自由な使い方が可能となっているのである。この点もまた、53年版に見られる言葉遣いが、「これからの敬語」の影響をあまり受けていないと考える好材料となるだろう。

3. 2. 3. 同一人物の待遇表現の使い分け

言葉遣いの違いは登場人物の世代や性格付けによってだけではなく、同じ人物が場面によって敬意表現を使い分けるということもある。この使い分けは53年、03年版両作品ともにある程度見られることだが、特に03年版に注目すべき点がある。本節では、紀子の周吉ととみに対する言葉遣いを比較しながら話を進めたい。

下の例は、周吉ととみが、死んだ次男の妻であった紀子に東京を案内してもらった後に紀子のアパートを訪れる場面である。（紀子の尊敬語・謙譲語表現には下線を付した。）

(4)a. 53年版（場面：紀子のアパートで）

とみ： 紀さん、もう本当に構わんで下さいよ。

紀子： いいえ、何のお構いもできません。

とみ： 本当に今日はおかげさんで。

紀子： いいえ、お父義さま、お母義さま、かえって<u>お疲れになったでしょう</u>。

（略）

紀子： どうぞ。（酒を出す。）なんにも<u>召し上がるものがなくて</u>。

周吉： いやあ。やっぱり上手いなあ。

紀子： お義父さまはお酒、<u>お好きなんですの</u>？

ここでは紀子に特に謙譲語の使用は見あたらないが、尊敬語がかなり表れており、可能なところは全て尊敬語で言い表されている。これは、03年版を見てもあまり変わら

ない。

(4)b.　03年版（場面：紀子のアパートで）

紀子：　どうぞ、お座りになって下さい。

とみ：　私らすぐ帰るけ、かまわんで。

紀子：　今お茶をお入れしますから。

とみ：　お茶これでええの？

紀子：　あ、すいません。お義母さん、私やります。ありがとうございます。ご夕食、今用意しますから。

とみ：　そんなええよ、忙しいのに。

紀子：　昨日の夜から、はりきって仕込んだんですよ。ぶり大根に、かぼちゃの煮付けに、茶碗蒸し。

とみ：　あら、全部昌二の好物やわねえ。

紀子：　お義母さんの味、大変だったんですよ、覚えるの。召し上がっていって下さい、ね。

（略）

紀子：　今お酒をお持ちしますから。

紀子は、周吉ととみの実の娘ではないこともあるが、二人に対しての言葉遣いは両作品とも全編を通してかなり丁寧と言える。登場人物の中でも一番丁寧で、特に03年版では他の登場人物との差がかなり明確に出ている。これは紀子の性格付けとも関係していると言えよう。前述したように、この物語の中で周吉ととみに対して一番の心づくしをするのが紀子であり、気持ちの優しい人間として描かれている。紀子は、とみの葬式が終わって子供達が早々に尾道を引き上げる中、一人何日か残って家の整理などを手伝ったりもしている。

次の例は、紀子が東京に戻るために周吉のもとを辞そうとしているときの会話である。未亡人としての紀子に対して、死んだ夫のことに縛られずに早く次の恋愛（結婚）をするようにと周吉が諭す場面だ。作品の最後の場面で、それまで控えめだった紀子が自分の気持ちを泣きながら訴える、クライマックスとも言える部分である。またクライマックスだけに、台詞の流れが03年版でも原作にことさら忠実に追いかけられている部分でもある。少々長いが比較してみたい。

(5)a. 53年版（場面：紀子が尾道の周吉の家を辞そうとする）

周吉： お母さんも喜んどったよ。東京であんたんとこへ泊めてもろうて、いろいろ親切にしてもろうて。

紀子： いいえ。なんにもお構いできませんで。

周吉： いやあ、お母さん言うとったよ。あの晩が一番嬉しかったいうて。私からもお礼を言うよ。ありがと。

紀子： いいえ。

周吉： お母さんも心配しとったけえど、あんたのこれからのことなんじゃがなあ。やっぱりこのままじゃいけんよ。なんにも気兼ねはないけえ、ええとこがあったらいつでもお嫁に行っておくれ。もう昌二のことは忘れてもろうてええんじゃ。いつまでもあんたにそのままでおられると、かえってこっちが心苦しゅうなる。困るんじゃ。

紀子： いいえ、そんなことありません。

周吉： いやあ、そうじゃよ。あんたみたいなええ人はないゆうて、お母さんもほめとったよ。

紀子： お義母さま、わたくしをかいかぶってらしったんですわ。

周吉： かいかぶっとりゃあせんよ。

紀子： いいえ。わたくしそんな、おっしゃるほどのいい人間じゃありません。お義父さまにまでそんなふうに思って頂いてたら、わたくしのほうこそかえって心苦しくって。

周吉： いやあ、そんなことはない。

紀子： いいえ、そうなんです。わたくしずるいんです。お義父様やお義母様が思ってらっしゃるほど、そういつもいつも昌二さんのことばかり考えてる訳じゃありません。

周吉： ええんじゃよ、忘れてくれて。

紀子： でも、このごろ思い出さない日さえあるんです。忘れてる日が多いんです。わたくし、いつまでもこのままじゃいられないような気もするんです。このままこうして一人でいたら、いったいどうなるんだろうなんて、夜中にふと考えたりすることがあるんです。一日一日が何事もなく過ぎていくのがとっても寂しいんです。どこか心の隅で、何かを待ってるんです。ずるいんです。

周吉： いやあ、ずるうはない。

紀子：　いいえ、ずるいんです。そういうこと、お母様には申し上げられなかったんです。

周吉：　ええんじゃよ、それで。やっぱりあんたはええ人じゃよ、正直で。

原作の53年版では、丁寧体の上に尊敬語と謙譲語を掛け合わせ、紀子の言葉遣いは他の場面と同様の丁寧さを見せている。ところが、現代版の03年版では様子が少し違ってくる。

(5)b.　03年版（場面：紀子が尾道の周吉の家を辞そうとする）

周吉：　本当にいろいろと、ありがとな。母さんも喜んどった。東京で色々世話んなって、、、。

紀子：　そんな、、、。

周吉：　いやあ（笑）。あんたんとこへ泊めてもろうた晩が一番楽しかった言うとったよ。本当にありがとう。

紀子：　私こそ、お義母さんに優しくして頂いて、、、。

周吉：　まあ、、、。紀子さん。

紀子：　はい。

周吉：　母さんも言うたと思うんじゃが、あんたのこれからのことなんじゃがな。もうわしらに気兼ねせんと、いつでもお嫁に行ってええんじゃよ。

紀子：　、、、。

周吉：　いやあ、むしろそうして欲しいんじゃ。あんたにいつまでも一人でおられると、心苦しゅうてな。

紀子：　そんなこと、、、。

周吉：　まあ、あんたほどのええ人じゃ。まあ、相手はいくらでもおるじゃろ。

紀子：　お義父さんが思ってるほど、私いい人間なんかじゃないんです。

周吉：　いやあ、母さんも言うとったよ。気持ちのきれいなええ子じゃって。

紀子：　私、お義父さんたちにそんな風に言ってもらうような資格ありません。私、ずるいんです。お義父さんやお義母さんが思ってるほど、そういっつも昌二さんのことばっかり考えてる訳じゃありません。

周吉：　そりゃええんじゃよ。忘れてくれてええんじゃよ。

紀子：　でもこの頃、思い出さない日さえあるんです。私、このままじゃいられないような気もするんです。このままずっと一人でいたらどうなるんだ

ろうなんて、ふっと夜中に考えたりすることがあるんです。一日一日が何事もなく過ぎていくのがとても寂しいんです。どこか心の隅で何かを待っているんです。ずるいんです。

周吉： いや、ずるうない。

紀子： いいえ、ずるいんです。そういうことをお義母さんに言えなかったです。

周吉： ええんじゃよ、それで。本当にずるい人はなそんなことは言わんよ。あんたは正直な人じゃ。わしらの思っとったとおりの人じゃ。

この対話からわかる通り、03年版ではただ一例を除いて紀子の発話から尊敬語と謙譲語が消え去り、全てが丁寧体で言い表されている。例(4)bで見たときには紀子の敬意表現に乱れはなかったはずなのに、この違いは何によるものであろうか。今まで隠してきた本心を泣きながら話すうちに心のたがが外れてしまったとか、数日間周吉と一つ屋根の下で生活する内に気心が知れてきたとか、いくつか理由が考えられる。いずれにせよ、ここでの会話は表面上の形式的なものではなく紀子の個人的な内容にかなり深く踏み込んだもので、紀子と周吉の距離が縮まっている場面だと言うことができる。それまで丁寧体で話していても、私的な内容の話になったり話題が深まっていったりすることで、対話者の心的距離が短くなると一時的に言葉が普通体に変わることは、Ikuta (1983)や山本(1989)などでも報告されている。例(5)bにおける紀子の言葉遣いの変化はこれに近いものがあると思われる。つまり紀子は、意識的にしろ無意識のうちにしろ、同じ相手との会話であっても、その時々の心の持ち方によって敬語の使い方を変えているのである。同じ事は原作の53年版では起こらない。

この他原作版と03年版で紀子の言動が決定的に異なるのは、03年版では紀子が周吉やとみに対して普通体でものを言っている場面が2度観察されることだ。それは、二人が紀子のアパートを訪ねたときに起こる。ひとつ目は、死んだ次男の写真が紀子の部屋に置かれているのを見て、次男のことに話題が移ったときである。

(6) 周吉： もう3年じゃのう。

紀子： ええ。（間）おなべ、見てこなくちゃ。

死んでもう3年経つかと周吉が漏らしたことに紀子は重い雰囲気を感じ取ったようで、しばらく間が空いた後「おなべ、見てこなくちゃ」と言い残してその場を離れるという場面だ。この発言は、周吉に返答を求める風でもなく、その場を離れる紀子自身へ

の言い訳のために放たれた台詞だととれる。ふたつ目は、3人で食卓を囲みながら、若いときは周吉が酒にだらしなかったという話をとみがしたところ、紀子が感慨深くこう言うのである。

(7)　紀子：　昌二さんとおんなじ！

この場合も、紀子の台詞はふと漏れたつぶやきのようなもので、特に周吉やとみに対して返答を求める性質のものではない。紀子が二人に対し普通体を使うのはこの2回だけで、どちらも相手に返答を求めないつぶやきとしての発言であることが共通している。このような「独り言」的発言の場合は、本来ならば丁寧体を使うべき相手であっても普通体の使用がおかしくならない例として今まで数々の指摘がなされている（澤崎, 2004予定; 鈴木, 1997; ネウストプニー, 1983; 野田, 渋谷, 迫田, 小林, 2001; 水谷, 1989）。2回の発言は周吉ととみが紀子のアパートを訪ねた時に起こっており、その前後には、例えば(4)bにあるような尊敬語と謙譲語の言葉遣いが並んでいる。実際に作品を見てみて、尊敬語と謙譲語の間に突然普通体が表れても違和感を覚えることはない。その理由は、紀子が「独り言」的発言にのみ普通体を使用しているからだろう。

上記のことから、同一の場面設定の中でも、発言の性質に応じて紀子が丁寧体と普通体、また尊敬語・謙譲語を使い分けていることが見てとれる。さらに、気持ちのあり方によっては、(5)bのように、独り言ではなく相手に語りかけている場合でも尊敬語・謙譲語を外して対話をするというようなこともされている。つまり紀子は、かなり丁寧な話し方を保ちながらも、発話の場面に応じて実際の表現方法を変えて言葉遣いに幅を持たせているのである。このことは03年版にのみ見られることで、53年版では確認できない。50年前の原作では、紀子がたとえ感情的に自分の気持ちを打ち明けるときであっても話し方のレベルを変えたりしないのだ。

3. 2. 4. 言葉遣いの変化の過程

以上、ふたつの作品における登場人物の台詞を比較することによって、現代版『東京物語』が原作に較べて(1) 敬語が簡素化されており、(2) 世代や人物に応じた敬意表現の変化がより自由で、(3) 同一人物でも場合に応じた敬意表現の使い分けをしていることがわかった。これらの違いにより、原作は52年に建議された「これからの敬語」を反映させた形とはなっておらず、この作品を見る限り、当時の状況としてはこ

の改革案をそのまま実生活に重ね合わせるには無理があったのだと解釈することができる。

「これからの敬語」に示されている内容が、今のように日常生活で使われるようになるためにはさらなる年月を要したと思われるが、おそらく1980年代前半には現代版『東京物語』の言葉遣いとほぼ同型のものが浸透していたと推察される。例えば家庭内で目上に対して敬語を使うか否かの調査に関しては、使わないと答えたのが1953年当時で32%だけだったのに対し、同じ場所で1972年に行われた調査では過半数に増加している（国立国語研究所, 1983; 野元, 1978)。1964年に行われた別の調査では、年齢が下がるほど家庭内での敬語使用には否定的な意見を持っていることが明らかになっている（田中, 1987)。1980年に入ると、家庭内で敬語を使用するかどうかを問題にするよりも、むしろもはや使わないことを前提として話が進められるようになっていく。その多くは、核家族化により敬語を使う相手（祖父母）が家族の中にいなくなった結果（大石他, 1983)、家族間の敬語が簡略化した（樺島, 水谷, キーン, 三國, 西村,1983; 宮地, 1983）というものである。

また1980年代には、家族間の言葉遣い以外にも学校での言葉遣いが簡素化され、学生が教師に対して尊敬語を使わず丁寧体のみで話していることが既成事実として指摘されている（樺島他, 1983; 外山他, 1982; 宮地, 1983)。その他、本稿では触れなかったが第三者敬語の使用が減少していること（大石, 1983; 大石他, 1983）や「参ります、致します、頂きます」等の言葉が、もはや謙譲語としてではなく丁寧体の一種として用いられている（樺島他, 1983）ことなども報告されている。対話の基調を丁寧体にすると規定した「これからの敬語」の示すところが1980年代前半の社会に浸透しているのがこれらの報告で見てとれる。

丁寧体が対話の基調として広がっていく過程において、伝統的な敬語の通念は廃れ、誰もが同じ言葉遣いをしなければならないという考えも弱まっていったはずである。言葉遣いの個人差が以前よりも許容され始めたであろうし、同一人物がバラエティに富んだ言葉遣いを獲得して場面に応じて使い分け始めるきっかけにもなったのではないだろうか。1973年の愛知県岡崎市での調査結果のひとつに、20年前に同地域で行われたものと較べ敬語の簡素化が確認された一方で、丁寧な場面ではより丁寧に、また乱暴な場面ではより乱暴な言葉遣いへと変化している点が挙げられているが、これは大変興味深いことである。

4．結論

本稿では、53年版と『東京物語』における敬語表現の使い方が、現代版とは大きな違いがあることを見てきた。違いは、以下の3点にまとめることができる。(1) 子供の両親に対する敬意表現が簡素化された。具体的には、現代版では尊敬語・謙譲語の使用がなくなり、丁寧体や普通体に換わった。(2) 敬意表現の表し方や簡素化の度合いは、世代や話者の性格などにより個人差が許されるようになった。(3) 同一人物でも、気持ちの持ち方や発言の種類によって敬意表現のレベルを使い分けるようになった。これらのことから、53年版『東京物語』は、その前年に発表された「これからの敬語」に示された内容を踏襲したものではなかったということがわかった。つまり、「これからの敬語」は当時の人々にとっても現実とはかけ離れたもので、今のように日常生活で使われるようになるには1980年を待たなければならなかったのである。

材料として使ったふたつの『東京物語』は示唆に富むものであったが、物語の性質上家族間でも親子の対話に集中してしまい、夫婦間、兄弟姉妹間などの敬語表現を観察・対比するには至らなかった。「これからの敬語」に示された内容が、具体的にどのような媒体・プロセスを経て普及していったのかについても明らかにできなかった。また、今回は二つの作品の相違点にばかり論が集中してしまったが、50年の月日を経て残る類似点についても考察を加える必要があるだろう。例えば敬語は簡素化されても、敬語を使いこなす人に対して肯定的な印象が持たれがちなのは今も昔も変わらないことや、老夫婦の会話が両作品共に妻から夫へは丁寧体で語られていることなどは興味深い。紙幅の制約上本稿ではこれらについて論じることはできなかったが、次回への課題として今後の研究につなげていきたい。

謝辞：

本稿の作成にあたり、貴重なご意見を寄せて下さったハワイ大学の池田佳子氏に感謝の意を表したい。なお、本稿における不備・誤りは全て筆者の責任である。

引用文献：

浅田秀子. 2000. 待遇表現の構造. 飛田良文、佐藤武義（編）, 現代日本語講座（第2巻）：表現 (pp. 128-150). 明治書院.

Ikuta, Shoko. 1983. Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences*, 5(1): 37-53.

井上史雄. 1983. 社会構造の変化と敬語の将来. 日本語学, 2(1): 13-21.

大石初太郎. 1983. 現代敬語研究. 筑摩書房.

大石初太郎, 外山滋比古, 寿岳章子, 米田武, 西村秀俊. 1983. 新しい敬語―美しいことば―（日本語シンポジウムIV）. 小学館

荻野綱男. 1983. 敬語調査の方法. 日本語学,2(1): 30-37.

樺島忠夫, 水谷修, ドナルド・キーン, 三國一朗, 西村秀俊. 1983. 日本語の21世紀―日本語はどう変わるか―（日本語シンポジウムIII）. 小学館.

熊谷智子. 2003. シナリオのある会話―ドラマの日本語の特徴―. 日本語, 22(2): 6-14.

国語審議会. 1952. これからの敬語. （文化庁国語政策情報システムのページ：http://www.bunka.go.jp/kokugo/）.

国立国語研究所. 1983. 敬語と敬語意識（国立国語研究所報告77）：岡崎における20年前との比較. 三省堂.

澤﨑宏一. 2004予定. 日本語教育における普通体と丁寧体の使い分けに関する考察. 外国語学習と外国語教育, 1.

松竹株式会社. 1953. 東京物語 (VHS). 松竹.

杉藤美代子. 2002. ドラマの音声. 日本語学, 22 (2): 16―23.

鈴木睦. 1997. 女性語の本質：丁寧さ、発話行為の視点から. 井出祥子（編）, 女性語の世界 (pp59-73). 明治書院.

田中章夫. 1978. 敬語論争はなぜ起こる. 北原保雄（編） 論集日本研究9：敬語(pp 174-186). 有精堂出版.

外山滋比古, 稲垣吉彦, 青木雨彦, 芳賀綏, 樺島忠夫. 1982. 美しい日本語―日本語はどうあるべきか―（日本語シンポジウムⅠ）. 小学館.

西田直敏. 1987. 敬語（国語学叢書13）. 東京堂出版.

ネウストプニー, J.V. 1983. 敬語回避のストラテジーについて. 日本語学, 2(1): 62-67.

野田尚史, 迫田久美子, 渋谷勝己, 小林典子. 2001. 日本語学習者の文法習得. 大修館.

野元菊雄. 1978. 敬語の使い分けの能力. 北原保雄（編）, 論集日本語研究 9 ：敬語 (pp. 198-210). 有精堂出版.

フジテレビ. 2003. 東京物語 (DVD). フジテレビ.

水谷修. 1989. 日本語教育と非言語伝達. 日本語教育, 67: 1-10.

宮地裕. 1983. 敬語をどうとらえるか. 日本語学(2)1: 4-12.

山口仲美. 2000. 敬語をこう考える（下）：日本語草子(4). 三省堂ぶっくれっと, 144. 三省堂.

山本富美子. 1989. 待遇表現としての文体. 日本語教育, 69: 77-92.